

## D-1 単一施設における透析依存性急性腎不全で発症した多発性骨髄腫の治療成績

○藤原英晃、高梨葉子、岩間幹一、羽山ブライアン、山倉昌之、竹内正美、末永孝生

亀田総合病院血液・腫瘍内科

【目的】透析依存性腎不全を併発した多発性骨髄腫の予後は極めて不良である事が知られている。今回我々は当院における透析依存性腎不全を合併した多発性骨髄腫の治療と透析離脱について検討した。【方法】1999年1月-2008年12月までの期間において当科入院となった透析依存性腎不全を併発した未治療多発性骨髄腫14例を対象とした。1999年-2004年の8例（男性7名、女性1名、年齢63-74（中央値72歳））では従来の化学療法（VAD6例、MMVD6例、MP1例）が施行され、2005年-2008年の6例（男性1名、女性5名、年齢74-85歳（中央値76.5歳））では新規薬剤を使用した化学療法（DT2例、VD1例、MPT3例）を行った。【結果】1999年-2005年の8例のうち透析離脱は4例（50%）、2005年-2008年の6例のうち透析離脱は5例（83%）であった。2群において透析離脱までの期間および血清クレアチニンの改善までに要した時間に差は認められなかったが、新規薬剤使用群では治療経過とともに改善する例が認められた。また血清の測定しえた症例すべてで血清 free light chain の濃度と腎不全の改善が相関した。透析依存例においても新規薬剤使用例で生存率の改善が認められた。【結論】各群の症例数が少なく今後の症例の集積が必要であるが、透析依存性腎不全を呈した未治療多発性骨髄腫において新規薬剤を初回治療から使用することで透析離脱率の改善が期待でき生命予後改善の可能性が示唆された。